

論文

## 台湾時代における川合三良の文学作品

——ある在台内地人作家にとっての皇民化政策——

松尾 教史\*

## 序文

近年、日本統治期の台湾文学の読み直しが進められている。特に、日中戦争以降に活躍した本島人作家たちについては、1970年代以降、次々と「復権」が試みられてきている。この時期に活躍した作家は多かれ少なかれ、それまで皇民化政策に迎合した作家であるという評価を受けていたが、70年代以降、そうした評価に代わって、皇民化政策から距離をとろうとした傾向を、多くの本島人作家たちの作品の中に読み取ろうとする研究がふえてきた。またこうした流れの中で、在台内地人作家たちがこの時期に果たした役割にも様々な角度から再評価が試みられるようになってきている。

台湾では、1937年の日中戦争勃発以降、台湾住民を「日本人化」しようとする「皇民化運動」が推し進められ、志願兵制度の導入や、寺廟整理、神社参拝の強制などが行われた。こうした動きは、文学界にも広がった。1937年には、台湾の内地人が経営していた大手新聞『台湾日日新報』や『台湾新聞』、『台南新報』が中国語欄を自主的に廃止し、唯一の中国語文芸雑誌『台湾新文学』が発刊を停止するなど、メディアや文壇から中国語が姿を消していった。そして、1939年まで日本の伝統文芸詩誌や一部の漢文雑誌を除いてほとんどの文芸専門誌が姿を消してしまった。こうした状況は、本島人作家たちにとっては自らの発表の場を奪うものでしかなかったとは言ってもない。一方、在台内地人作家たちの中からは、日本語文学の枠組みの中でもう一度台湾文学を活性化させようとする動きが出てきた。それでは、彼ら在台内地人は、何故、そして、どのようにして台湾文壇を活性化しようとしたのであろうか。

まず、ここでは当時の代表的な在台内地人作家の一人である、西川満（1908 - 99）が1939年に発表した「台湾文学界の展望」という論説を見てみよう。この論説の中で西川は、「日本はやがて台湾を中心として南に伸びてゆくであらう」「われら文芸の道に携はるもの、今にして深く自覚を持たざりしならば、後世、子孫に対して何の面目があらう」、あるいは、「華麗島の文芸をして、南海にふさはしき、天そそり立つ巨峯たらしむる」ことで、台湾の文学を「光栄ある結実期」に到達させよう、と呼びかけている<sup>1</sup>。

この論説を発表した1939年、西川は「台湾詩人協会」を組織し、同年この組織は「台湾文芸家協会」に改組されて、1940年には、機関誌『文芸台湾』が創刊された。「台湾文芸家協会」の設立趣旨は、「低迷せる台湾文化に活を与へ、この地に澁刺たる文学運動を展開」することであった。さらに西川はこの会の性格を「全島の詩人団体」とであると主張したのである<sup>2</sup>。

また、西川とともに『文芸台湾』を支えた人物の一人として、台北帝大文政学部の講師を務めた島田謹二（1901 - 93）の名が挙げられる。島田は、台湾文学は「外地文学」として進むべきだと主張していた。「外地文学」とは、彼の論によれば台湾の文学に、「外地」としての「独占的特色」なるものをもたせたものである<sup>3</sup>。そして彼が、なぜ「独占的特色」を持たせようとしたのかについては次の文章を見ていただきたい。

---

キーワード：皇民化政策、総力戦、湾生、内台融和

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 共生領域

台湾の風土と生活に即して考へるに、内地人が永住するためには、もっと潤いのある Life——もっと潤いのある情操生活がこの地に於いて可能とならなければならぬ<sup>4</sup>。

さらに彼は、あるべき「外地文学」とは「内地とは異なる風土の下に供住する民族の考へ方、感じ方、生き方の特異性を生きたままに「生に即して描き出す」ものでなくてはならないと主張し、このような文学を「外地文学に於けるレアリスム<sup>5</sup>」と名付けた。

その上で彼は、「外地文学に於けるレアリスム」を、いわゆる「プロレタリア・レアリスム」と区別し、後者は「政治的目標に向かってする宣伝や教唆や曝露やを志すものであって、文芸の本領を逸脱し去っている<sup>6</sup>」文学だとして切り捨てている。また、本島人の文学的営みについては、「まだ本島人の優秀な作家を出していないけれど」、「非伝統的な様式の文学には、内地にも名を知られた本島人作家を出しかけているやうである<sup>7</sup>」などと、冷やかに言及するにとどまっている。

島田は、台湾に「内地人が永住する」ために必要な「潤いのある情操生活」を可能にするために、この地での文学的営みに、「独占的特色」を持たせようとした。しかしそのような文学の担い手は内地人のみであり、たとえばプロレタリア文学のような、本島人が台湾の地で築いてきた文学についてほとんど認められなかったのである。

結局、西川や島田たちにとって、台湾とは日本が南方に勢力を拡大するための拠点であり、文芸家としてこうした国策に協力する立場で台湾の日本語文学を活性化しなくてはならないと考えていた。しかし彼らにとって台湾における日本語文学とは内地を模倣するようなものではなく、台湾で内地人が永住できるような、台湾独自の日本語文学でなくてはならず、本島人作家の作品は彼らの視覚の外に置かれざるをえなかったのである。

彼らのこうした視点に関しては、橋本恭子が、島田の文学研究には、「在内地人の日本文学を「比較文学」的見地から研究したい」という関心も含まれていたのだ、と述べ、単に島田は、統治者意識から在内地人文学を研究していたわけではないのだと主張している<sup>8</sup>。しかし、橋本が言うように、島田の研究の問題意識が、彼の中にある台湾に対する統治者意識だけでなかったのだとしても、島田や西川のこのような考えに対しては、本島人ばかりか、内地人の間からも、異論が生じることとなっていたのだ。

例えば、島田や西川に不満を抱いた作家の中には中山侑<sup>すずむ</sup>らのように、本島人の書いたプロレタリア文学などにも理解を示し、ついに西川に不満を持つ本島人作家たちとともに『台湾文学』という雑誌を創刊するに至った人々もいた。

また、お藤元の『文芸台湾』の中にも西川らと異なった態度を見せた内地人作家がいた。本論では、そうした作家の一人として、川合三良(1907-70)を取り上げようと思うのだが、本論の目的はこの時期の台湾における作家(本島人、内地人間問わず)が多かれ少なかれ直面していた、皇民化政策の問題に川合がどう向き合ったかを明らかにすることにあり。

## 第一章 川合三良とは何者か？

### 第一節 川合の生い立ちとその家族について

川合の作品を深く読み解くためにも、まず、川合の生涯を辿っておくこととする。なお、そのために私は今回、川合の長兄の息子・一良氏、川合の長男・高田良介氏に取材をした。以下はそうした取材を踏まえたものである。

川合三良の父、良男は、神戸にあった海運会社・「後藤廻漕店」で働いていたが、日本が台湾を領有した1895年、樺山資紀が初代台湾総督として赴任する際に良男は樺山と同船している。そして彼は民政長官・後藤新平の下、台湾全体の海運業を引き受け、いわゆる「政商」として台湾と内地を行き来していた。その後、良男の会社が日通に合併されると、良男は「川合名会社」を設立している<sup>9</sup>。また、川合一良氏によれば、三良の実母(名前は未だ不明)は、三良が幼い頃に亡くなり、その後、父の良男はあいという名の女性と再婚したとのことである。

1907年、川合三良は良男の三男として、大阪に生まれた。二人の兄(長兄・良蔵、次兄・コウ——漢字表記不明)がおり、そのほか、彼の4つ下の弟として四良、その下に妹・弘子がいる。川合の長男・高田良介氏によれば、川合は台湾の学校には通っていなかったとのことだが<sup>10</sup>、その少年時代についてはまだ不明な点が多い。ただ、少な

くとも川合とその家族が植民地における良男の事業で生計を立てていたことは確かである。

## 第二節 学生時代、台湾での創作活動、戦後の足跡

三良は岡山県立第二中学校、第六高等学校を卒業している。高校時代、『朱鷺』、『窓』などの詩歌同人雑誌を作り、短歌などを載せていた<sup>11</sup>。その後京都帝国大学文学部国文科入学<sup>12</sup>。在学中に治安維持法違反で逮捕される。なお、三良とともに、学年で3つ下の弟・四良と妹・弘子も逮捕されているようだ。川合一良氏によれば、三良は、この頃、共産主義青年同盟や反帝同盟に参加していたとのことである。また弟の四良は日本共産党に入党していたようであり、彼は中途退学を余儀なくされることになったようだ。逮捕後、三良は「転向」を誓わされ、起訴猶予となり、釈放される<sup>13</sup>。1933年12月、入営し、その十日後には満州国の朝鮮国境近くの間島省局子街に駆り出される。戦後の川合の述懐によればこの入営は「監視付き」であったという<sup>14</sup>。翌年除隊し彼の父と兄が台湾で経営していた「川合合名会社」に就職し移住する。37年9月台湾で召集され、中国戦線に従軍、38年3月に負傷のため除隊している<sup>15</sup>。36年に齋子と結婚<sup>16</sup>、1939年、長男・高田良介氏が誕生する。

1941年から43年にかけて台湾で創作活動を展開する。代表作に、「轉校」(『文芸台湾』1941年5月)、「或る時期」(『文芸台湾』1941年7月)、「出生」(『文芸台湾』1941年9月)、「婚約」(『文芸台湾』1942年1月)、「一つの縮図」(『文芸台湾』1942年5月)、「襦袢」(『文芸台湾』1942年9月)、「康吉と増子」(『文芸台湾』1942年12月)、「家のない家主」(『文芸台湾』1943年4月)がある。なお、『文芸台湾』では総務部と会計部を担当していた<sup>17</sup>。1942年、「轉校」から「婚約」までの4作品が評価され、「第一回文芸台湾賞」を受賞。1943年に臨時召集され、台北第一連隊に入り、そこで敗戦を迎えた<sup>18</sup>。

戦後は岡山市内にある兄・良蔵の家に1950年まで住み、山陽女子高校で国語教師として勤務。1949年、三良の祖父の代からの親戚である高田家に一家揃って養子縁組、高田姓を継ぎ、翌年、兵庫県浜坂に転居<sup>19</sup>、それに伴って職場を兵庫県立浜坂高校、ついで県立豊岡高校に移し、死の直前まで勤務し、一方では教職員組合で活動し続けた。また、戦後、同人誌『但馬文芸』に参加、同時に新日本文学会に所属。新日本文学会の分裂後「日本民主主義文学同盟」に参加し但馬支部の責任者として『但馬新文芸』を発行。

戦後には、「脱走」(『生活』1948年4月)、「美しい島」(『文学手帖』1949年9月)、「怒りの画家」(『生活』1950年5月)、「空は青」(『文学の窓』発表時期不詳)、「ある中隊の話」(『文学の窓』発表時期不詳)、「沖繩」という男(『但馬新文芸』1964年10月)、「一九三一年の秋」(『但馬新文芸』1965年3月)、「赤い紙切れ」(『但馬新文芸』1965年12月)を発表した<sup>20</sup>。また、詳しい執筆時期は未だ不明だが、台湾時代では「京都」、戦後では「最初の朝」「ざまを見る」「追いつめられて」「二畳の部屋」「犯人探し」「父帰る」、といった未発表作品もある<sup>21</sup>。

## 第二章 悪戦苦闘する内地人たちの物語

### 第一節 「灣生」と内地人社会との「壁」——「轉校」より

川合の作品についての先行研究は極めて少なく、垂水千恵が彼の作品のうち、「戦時色」の強い作品の一つとして「出生」の名を挙げて言及している程度で<sup>22</sup>、川合を主題として取り上げたのは唐瓊瑜の研究ひとつである。唐は、その論文の中で川合とその同時代に活躍した本島人作家・周金波(1920-96)との比較検討を試みている。

周金波は、内地生まれの本島人であり、『文芸台湾』の表紙に描かれた台湾の風景に、郷愁を感じて台湾に帰ったという作家である<sup>23</sup>。そして台湾で創作活動を開始したのは、川合とまさに同じ1941年である。また、周が、その父も含めて内地で暮らした経験のある作家であるのに対して、川合は、その父の代から台湾に縁の深い作家である。

唐は、この内地に縁の深い本島人、台湾に縁の深い内地人を好一対として対照しつつ、彼らをともに「移民二世」としてとらえ、二人の作品の中に、「移民二世」特有の性格があるのだと主張している。

彼らに共通する「移民二世」特有の性格とは、唐によれば「自分の身近な存在を厳しい目で凝視していた<sup>24</sup>」ことにあるのだという。つまり唐に言わせれば、川合は「台湾人に対する態度が寛容」であり、反対に周は本島人に対して「厳しい批判をして」いること、逆に内地人に対して川合は「批判的」であり、周は「憧れを持って」いる、ということなのである<sup>25</sup>。そして、唐は、「内台融和」の問題に触れつつ、川合の問題意識を次のように説明している。

川合氏にとっての「内台融和」は決して内地人を「台湾人化」するのではなく、台湾人を「皇民化」、即ち日本人にさせることによって、「本島人」との間の見えない「壁」を超えることが可能になるということになる。そして「皇民運動」というのも「内台融和」の一環に過ぎません。こういう意味から考えると、川合氏にとって、「内台融和」は戦時下だからやるべきだというだけではなく、台湾社会になじもうとしている「第二世代」が目すべき課題であります<sup>26</sup>。

唐の論によれば、川合は台湾に移り住んだ世代の第二世代として、内地人が台湾社会になじむために、本島人を内地に同化させようとした作家だということになるが、このような論は果たして妥当なのであろうか。というのは、先に述べたように「内台融和」を推進した作家にしては、本島人と内地人との関係を描いた作品はあまりにも少なく、「一つの縮図」(『文芸台湾』1942年5月)という作品以外は、内地人ばかり描いているのである。また、その「一つの縮図」においてさえ、登場する本島人が簡単に内地への同化を受け入れているとは私には到底思えないのである。

本論は、唐の問題意識を踏まえつつ、まず、川合が内地人ばかりを描いた作品の中で何を問題にしたのかを考察したい。そうしなければ、なぜ川合が総力戦期の台湾に住みながら、本島人と内地人が関わらない物語を書いたのかが見えないからである。その上で、「一つの縮図」をどのように読むことができるのかを考察して、これらの2つの異なるタイプの作品を通じて川合が総力戦期の台湾で一体何を主張しようとしたのかを明らかにしようと思う。

私は彼が戦時下の台湾で発表した8作品のうち、本島人と内地人との関係を直接に描いたのはわずかに一つの作品のみであるということに、彼の台湾時代の文学作品における一つの大きな特徴があると考えている。

さて、これらの物語に登場する人々の、台湾との関わり方を見ると、3つのパターンに大別することができる。

まず、第一には、台湾に生を享けた内地人＝「湾生」が内地で悲しみを味わう物語である。このパターンは川合の『文芸台湾』におけるデビュー作となった「轉校」に見ることができる。

この作品は、大正初期に父の仕事の都合で台湾から内地の〇県に渡ってきた小学2年生・竹田洋一少年を主人公とした物語である。彼は転校直後から周囲の児童たちから「生蕃」とからかわれ続ける。内地の中でも田舎の小学校では、台湾からの転校生は珍しく、それゆえに多くの内地人児童は、台湾の「原住民」を連想したのである。

洋一の父親は、日本の領台後間もなく、裸一貫で渡台し、洋雑貨商として財を成した人物である。この父親は仕事に忙殺されており、洋一を内地に連れ帰った後、彼が通うことになる小学校に連れて行って挨拶を済ませてすぐに台北に引き返している。また、洋一の実母は洋一が内地に渡る前に病死しており、洋一は内地にいる伯母に育てられることになった。彼は自らの本心を伯母に伝えることはできず、台湾で亡くなった母を思うのであった。作中で川合は洋一少年のこうした心情を次のように描写している。

母親が生きてさへみれば、台北を離れてこんな寒い暗いところに来なくても、又、あんないやな学校へ行かなくてもいいのにと考へた<sup>27</sup>。

彼は、内地に渡ってきた当初、内地を「台北より明るく、美しく、夢のように静かな世界」(p. 438)として思い浮かべていたが、今やその夢は破れたわけである。内地に失望した洋一は、いつしか故郷・台北の街を夢に思い浮かべていた。彼の夢の中では、彼がかつて小学校に通うために使っていた街道や、街道の周りがある風景が広がっている。そのうち亡くなった母が登場し、洋一は母を呼ぼうとするが声が出ず、母の姿を見失ってしまう。やがて彼は鉄道の駅に辿り着く。丁度駅では汽車が発車するところだ。そこでは母や父、そして彼と仲のよい友達などが汽車の窓から顔を出している。彼らは洋一を手招きするが、洋一の足は一步も動かない。そのうち、汽車は動き出し、洋一は夢の中で一人取り残され、大声で泣き出してしまったのであった。

なお、この作品は、大正初期に竹田洋一は小学校2年生であり、1907年生まれで川合とほぼ同年齢であることや、内地から裸一貫で台湾に渡り一代で財をなしたという父親像や、実母を幼くして亡くしていることから見ても、川合自身の家庭環境と符合しており、自伝的要素の強い作品であると言える。

さて、ここで川合が台湾の地をどのように考えていたかを見てみよう。唐氏は、この点に関して、「故郷」という概念に光をあてつつ、「故郷」を「本籍」と「郷愁」が喚起されるような場に分けて分析している<sup>28</sup>。そして川

合にとって内地とは、「本籍」ではあっても「郷愁」を抱かせるような場ではなかった、と言うのである。彼によれば、川合にとっての内地とは「慣れない環境」に過ぎず、たとえ「郷愁」を抱いているように思えたとしても、それは「おそらく前の世代から聞かされた話によって、美化された幻のようなもの」でしかなかったのである。その上で唐氏は、川合が帰郷したいと考えたのは台湾ではなかったか、と主張している<sup>29</sup>。

実際、「転校」での洋一少年は内地を「暗くて寒い」、「嫌な所」としてとらえるのだから、この指摘は妥当であろう。結局この作品は「湾生」が内地社会との間の「壁」に苦悩する物語であり、洋一の抱く「郷愁」はその苦悩の産物に他ならない。

## 第二節 植民地台湾を訪れ孤独を引き受ける内地人——「或る時期」より

第二のパターンは内地生まれの内地人が台湾を訪れる物語であり、「或る時期」がその典型である。この物語は、大学で文学を専攻していた竹田洋一が、「下らぬ思想の遊戯に溺れた」(p. 455) ことを理由に卒業間際に停学処分を受けたところから始まる。彼はそのために一年卒業が延びていたが、その期間を利用して卒業論文を書いていた。しかし、執筆は一向に進まず、精神を病んでしまう。彼はこの状況を克服するために、8年ぶりに故郷・台湾の土を踏むことを決意する。

彼の精神の病の原因は、真裸の赤ん坊が大きな汽船の甲板に寝かされたまま海の上を漂っているという、彼が見続けていた奇妙な夢である。そしてその赤ん坊こそが彼自身なのであった。しかもその赤ん坊は甲板の上で衆人環視の中で泣き声をあげている。彼を好奇の眼差しで見ている人々の中には彼が一番嫌っている人間もいた。しかもその赤ん坊は痩せこけて貧弱な肉体を晒しており、その肉体を多くの人の視線が嘗め回しているのだと思うと、たまらない気持ちになってしまう。

彼の夢の原因は、「お前は台湾に行く汽船の中で生まれたのだ」という、子供の頃に聞かされた話の記憶が残っていることである。彼は最初はその話を疑っていたが、やがて、そうに違いないと一人で決め付けてしまう。妄想はその後ますますエスカレートし、ついには彼の「洋一」という名が「大洋の真中で生まれたのに因んで、船長が命名した」(p. 444) ものだと思い込むまでになるのである。

こうした精神状態を克服すべく、彼は台湾に到着し、叔母と従妹の妙子に会う。洋一が一番気楽に話せたのは妙子の方であった。なぜなら彼女は洋一に対して「ただ従兄だといふ以外には何らの関心を持って」おらず、彼女自身が洋一に話して聞かせる「色々な小さい不満や屈託や煩悶は、直接洋一には何らの交渉も関係もないこと」だったからである (p. 455)。しかし、彼女のそうした態度は、停学になり、精神を病み、卒業論文が書けない彼にとって、「知ったかぶりの議論を振り回されるより」、むしろ「その方がずっと有り難い」ものであった (p. 455)。そのうち彼の精神は落ち着きを取り戻し、論文執筆は進んでいった。この時の洋一の心境の変化を川合は次のように描いている。

生活の根を持たない浮き草の様な存在を、彼は振り返ってみた。自分は完全に孤独であると思った。決して甘えた気持ちではなく、これは肅然とした現実であった。足がかりとし、より所として立ち上がるのは、結局、自分自身以外には何もなかった。顔を洗ふだけではなく、齋戒沐浴して、出直さなければならないと思つた。(p. 455)

洋一の見る夢や妄想は、彼自身の孤独感の表れに他ならない。彼は「思想の遊戯」に溺れ、停学処分を受け、やがて精神を病んでしまったために内地を離れるのだから、「転校」同様、彼にとって内地とは暗い思い出のある地でしかない。

しかし、台湾に行ったところで、洋一は何か新たな絆を発見するわけではなく、「足がかりとし、より所として立ち上がるのは、結局、自分自身以外には何もなかった」という開き直りにも似た境地にたどり着くだけである。洋一は、内地でも台湾でも孤独であることには変わりはなく、彼にとって台湾とは、「郷愁」が喚起されるような場ではなく、地に根付かぬ自らの立場を確認する場に過ぎなかったのである。

### 第三節 植民地台湾に移住し苦闘する内地人たち

最後に、第三のパターンである、苦闘する内地人の物語を考察する。たとえば「襖褌」の主人公・佐倉敏夫は、社会運動に挫折し父親から疎まれ、なおかつ父親が経営していた病院の内地人の看護婦を妊娠させて、結果的には勘当同然に看護婦と共に渡台している。また「出生」に登場する中国戦線からの帰還兵・竹田洋一には、台北に内地人の妻がおり、「婚約」は、中国戦線に従軍している沢田健二の婚約者である台北在住の内地人女性・酒井貞子に、沢田の戦友が恋をしてしまう物語である。これらの作品もまた、全て内地人のみでその人間関係を完結させているが、実は内地人作家の小説においてこのような物語の設定は川合と同時期に活躍していた濱田隼雄（1909 - 73）にも見られるものである。彼は1941年から『文芸台湾』誌上で「南方移民村」を連載していたが、その物語の舞台は内地の製糖会社が作った移民村である。ここで濱田の描く内地人像を象徴するような箇所を見てみることにする。

〔(中略) 本島人の中に入って、同じやうにこの島の大地に根を下ろすわけではない、彼らのまだきりひらいてゐないところまでどしどし開拓してだな、ほんとうにこの土地を自分のものにならなければならないんだよ<sup>30</sup>〕

このように、この作品にはまるで資本や国家の意思を代弁するかのように台湾の大地の領有と、その領域の拡大を露骨に表明する内地人移民が登場する。これに対して川合の描く内地人像は、濱田のそれとは対照的なものである。

「襖褌」の結末は、台湾に渡った後、長男の出産を機に父からも赦されるといふものであるという点では、見かけこそハッピーエンドであるが、台湾での若夫婦の生活は決して順調とは言えない。たとえば出産間近になっても、自分たちが住む借家が見つからず、敏夫が信子にその苛立ちをぶつけてしまったり（p. 518）、生まれたばかりの長男が消化不良を起こして夫婦ともども「泡をくって」しまったりする（p. 522）など、彼らは物語の結末近くまで新たな環境の下、住居や子供のことで悩み続けるのである。

また、「出生」は竹田洋一が、中国戦線から台北に戻った後にマラリアや腹膜炎に罹り、機関銃が火を吹く夢を見てしまい、なかなか日常生活に復帰できずに苦悩する物語であるが、洋一の悩みは病にとどまらない。彼の父と兄が経営していた「竹田土地建物会社」の所有地を内地人の土地ブローカーが洋一達の会社の経営が悪化しているという噂を流し、何としても土地を売却させようと策動する。洋一は、病をおして、同胞であるはずの男の策動に対処せざるをえなくなる。やがて彼の病は治り、彼の妻・弓子は出産をするというハッピーエンドを迎えるが、やはりこの物語でも結末に至る過程では、洋一はなかなか台湾社会で落ち着くことができないのである。そして「婚約」では、沢田は婚約者である貞子を残して戦死し、残された彼女が悲しみに耐えるという結末を迎える。

結局、濱田が体制に順応した移民村の住民を描いたのに対して川合は、差別や、権力による社会運動の弾圧、弾圧された後の肉親との軋轢や、勘当同然の渡台、戦争による婚約者の死、という戦時下の苦悩に直面した内地人の生き様を竹田洋一、佐倉敏夫、酒井貞子といった人物を通じて書き継いだのだ。

この総力戦期の内地人の苦しみは、実は内地人と本島人との間の「壁」をも作り出していると言えよう。なぜならこれらの問題は彼らにとっては余りに大きな苦しみなので、彼らが他民族に関わる余裕があるとは考えられないからである。

## 第三章 内地人と本島人との関わりについて

### 第一節 内地人社会になじまぬ本島人——「一つの縮図」における「内台融和」

今度は、川合が台湾で、本島人と内地人との関係性を描いた唯一の作品である「一つの縮図」について考察してみよう。この物語は、中国地方のある都市（O市）における県立中学校で、時田栄助と、その同級生で、台湾の本島人地主の息子・黄清合とが大正10年頃に出会うところから始まる。栄助は8歳まで台湾に住んでいた経験があり、そのためか、台湾生まれの黄清合と親しくなっていく。さらにこの物語では、栄助の友人・田村茂夫という幼年学校志望の田村茂夫（物語の冒頭の時点では高等小学校二年）が登場し、3人は、20年後に再会することを約束する。茂夫はこの後、結末まで登場せず、小説の中で有機的な役割を果たすには至らないが、栄助と清合は高校までは同じ所に進み、大学で京都と東京とに別れることとなる。栄助は高校で詩に没頭し、大学では社会運動に参加し、検

挙された経験もある。釈放後、彼は満州事変に直面し、軍隊に入る。除隊後、栄助は台湾で働くことになるが、日中戦争勃発後、再度軍隊に入る。そして栄助は転戦先の海南島において、陸軍大尉で、隊長となっていた田村茂夫、そして軍の通訳宣撫班の一員となっていた黄清合との再会を果たす。それは彼らが再会を約束してから丁度20年後のことであった。

この作品は、内地の〇県で出会った、黄清合という台湾人と、時田栄助・田村茂夫という内地人たちが、別々の道を歩み、戦地で3人とも皇軍兵士として再会するという皮肉な結末を迎えている。

先ほど述べたように、唐の考えによれば川合は台湾人を「皇民化」させることによって、「本島人」との間の見えない「壁」を越えることが可能になると考えていたこととなる。

このような見解に沿えば、黄清合は、内地に同化を果たした人物という風になるが、そうとは読めない箇所がある。それは、栄助が、煙草屋の娘に好意を抱いていることを清合に打ち明けるといふ場面である。清合もまたその娘に好意を抱いているのだという。そこで栄助が清合に突然、「君は内地人の娘を結婚する意志があるかい」と尋ねる（p. 504）。これに対して、清合は「ないね」とはっきりと言い切ってしまう。作中では清合が「ない」といった真意は述べられていないが、内台結婚を通じて内地と台湾が交わりあうことの困難さを象徴するかのよう思える場面である。

実はこの物語の冒頭では、栄助と清合が出会った際、栄助が「中学では、殆ど君を珍しさうに見る人はゐない様じゃな」と問いかけた時、清合は「さうではないよ。なんとも思っていないのさ。僕だって同じ日本人だもの（中略）」（p. 485）と応じている。

しかし、清合の「同じ日本人だもの」という言葉と、内地人との結婚を拒否する態度を併せて考えてみると、清合は口では「日本人」であると言いながら、同じ「日本人」であるはずの本島人と内地人との結婚は拒絶するような姿勢をとっていることになる。

また、清合は意志が強く、自己の主張を守り、級友達が馬鹿話をしても笑うことは少ない（p. 497）人物として描かれている。さらに、彼はクラスの中では「栄助以外には親しい友達はず、それでゐて寂しがって居る様子も見せないよう」に振舞っている（p. 497）ことから見ても、「僕だって同じ日本人だもの」という言葉とは裏腹に、実はクラスの中では内地人たちとはなじんでいないことがうかがえる。以上のことから川合は「内台融和」というスローガンから距離を取っていたといえよう。

## 第二節 民族や生き方の差異と戦争という枠組み

さて、それでは、主人公たちの民族の違いに加えて、栄助と茂夫の生き方の違いにも注目して、この物語の結末の意味を考察してみよう。田村茂夫、時田栄助、黄清合のうち、田村茂夫は、栄助と清合とは違い、高等小学校に通っており、物語の冒頭から既に違った道を歩んでいる。そして、物語の結末でやっと、茂夫は陸軍大尉として栄助と清合の前に再び現われるのだから、恐らく幼年学校を卒業し、職業軍人としての道を歩んだのであろう。これに対して、栄助と清合は同じ高校に進むが卒業後、清合は東京で医科大学に進み、栄助は京都の大学で経済学部に入學する。

この二人が高校に進んだのは、大正末から昭和の初めにかけての不況期であった。そんな中、彼らの高校では「赤い思想の波」（p. 501）が学校の中にまで押し寄せてきた。

清合もまた、彼の友人たちから研究会等に誘われるが、彼は拒否し続ける。一方栄助は、文学作品を読み耽り、学校の雑誌に小説を発表したり、仲間と詩の雑誌を作ったりしつつ自らの生き方を模索し続けるのであった。つまり清合は、高校でも内地人たちの輪に入ることはなく、栄助は、自分の生き方に悩みながら社会運動からは距離を置き続けていた。

栄助は、大学に入ると、高校時代には距離を取っていた「赤い思想の波」に飲み込まれ、やがて検挙されてしまう。検挙後2ヶ月で釈放された栄助を待っていたのは、満州事変であった。彼は軍隊に自らの生き場所を求め、満州に赴き、「匪賊討伐」に夢中になってしまう。除隊後、彼は台北で、かつて自分の父が関係していた機械類の販売会社に就職する。そこで彼は清合が台南で開業医として活躍しているのを知るが、手紙を書くこともなく、二人は台湾でも交わることがない。なお、この3人が交流のない期間は、栄助・清合は高校卒業から物語の結末までの10数年

間であり、この2人と茂夫とに至っては、冒頭の再会の誓い以来一度も交流する場面がないのだから、20年間にも及ぶ。

それまで交流が途絶えていた3人の、占領地・海南島での再会は唐突で、何の前触れもない。栄助が海南島に上陸すると、自分の隊の隊長が田村茂夫であり、同じ隊に黄清合もいることが分かるのである。川合は作中で、3人の再会の場面を「あまりに話がうま過ぎる」(p. 509)と表現している。

また、栄助が茂夫に気付いた場面を見ると、栄助は一旦は「おお、田村か」と声をかけるが、次の瞬間には、「自分は時田栄助に間違ひありません」と言葉遣いを変えながら敬礼する(p. 509)。この場面から、この3人の男たちが隊長と内地人兵士、本島人兵士という風に、再会した時には既に皇軍の序列に組み込まれていることを見て取ることができるであろう。

川合はこの唐突で「うますぎる」再会の場面を通じて、総力戦期では、異なる民族同士や、たとえ同じ内地人であっても生き方の異なる者は、所詮戦争の枠組みの中でしか、しかも序列化された状態でしか交われないという、悲しい関係性の「縮図」を描いたのである。

### 結論——川合三良にとっての皇民化政策

川合の台湾時代の作品は、二つのタイプに大別することができるであろう。第一のタイプとは、悪戦苦闘する内地人たちを描いた作品である。このタイプには内地で社会運動に挫折した上、親からも疎まれる人々の物語、同じ内地人でありながら台湾で生まれたという理由で他の内地人児童から差別を受ける子供の物語、内地になじみず渡台し、台湾でも悪戦苦闘する内地人の姿に光をあてた物語が含まれる。これらの作品では内地人たちはそれぞれが戦争や権力による弾圧や差別などによって大きな苦しみを味わっており、本島人に目を向けようがないくらい必死に生きざるを得ない。そして、その余裕の無さこそが、本島人に対する「壁」を作っているのである。

第二のタイプ、つまり「一つの縮図」は第一のタイプと異なり、本島人と内地人との関係性を直接に描いた上で、内地人同士の間にある「壁」も描いている。この小説では、見かけこそ本島人と内地人とが交わりあっているが、戦争や軍隊という枠組みにおいては本島人と内地人との間のみならず、同じ内地人の間にも一つ一つ壁がある、ということが示されている。

すなわちこれら2つの異なるタイプの作品は、総力戦体制には内地人同士や、内地人と本島人との間に、それぞれ深い矛盾が内在していることを違う表現で描いたものなのだ。

さて、川合が三度目の召集を受けた1943年、台湾では「皇民文学」という言葉が作られた。井出勇によれば「皇民文学」という言葉は、1943年5月号の『台湾公論』に掲載された、田中保男(生没年不明、当時・台湾新聞社文化部長)の「私は斯う思ふ——台湾の文学のために」や、西川満が『文芸台湾』に書いた「文芸時評」というコラムではじめて登場したものである<sup>31</sup>。そして「皇民文学」とは、西川満によれば、「勤行報国隊に、志願兵に活発な動きを示している<sup>32</sup>」ことを描く文学、つまり皇国日本に既に協力してしまっている人々を描く文学なのである。

これに対して、皇民化政策を推進する作家のそばにしながら、内地人のみが登場して苦闘する物語と、本島人と内地人との関係を描く物語という2つの異質なタイプの作品を書き分け、「内台融和」どころか、一枚岩の「皇民」などそもそも存在しえないのだと主張した作家もいた。それがたとえば川合三良なのである。

では、最後に彼の戦後の文学活動について触れておこう。彼は台湾の歴史や日本軍を主題にした作品をいくつか描いている。たとえば、台湾軍の一部隊における玉音放送後の人間模様を描いた「最初の朝」では反乱を恐れて本島人兵士を監視する内地人将校や<sup>33</sup>、脱走する本島人兵士の姿などが描かれ<sup>34</sup>、その結末では台北に向かう「変てこな兵隊たちの行進」を農民たちが「あきれた顔」で見送っている<sup>35</sup>。まさにこれらの描写は総力戦体制に内在する民族間の矛盾や、軍と植民地の民衆との乖離を物語っているに他ならない。

また「美しい島」という小説では、台湾「原住民」の反乱・霧社事件(1930年)を自分の子供に「すじ道をたてて<sup>36</sup>」語り継ごうと思い悩む「私」という人物が描かれている。結局、彼が戦時期に抱えていた皇民化政策への批判意識は、植民地や日本の起こした戦争とは何だったのかを戦後の日本社会に問いかけるという形で戦後も活かされ続けたのである。



注

- 1 中島利郎「日本統治期台湾文学研究——日本人作家の抬頭」(『岐阜聖徳学園大学紀要』(外国語部編)第44集通算第49号2005年)、p.45。
- 2 (注)1に同じ。
- 3 島田謹二「台湾の文学的過現未」(河原功監修 日本植民地文学精選集13、【台湾編】1、西川満編『台湾文学集』ゆまに書房2000年)、p.31。
- 4 同上、pp.18-19。
- 5 同上、pp.30-31。
- 6 (注)5に同じ。
- 7 同上、p.13。
- 8 橋本恭子「島田謹二『華麗島文学志』の研究対象について」(東京大学比較文学比較文化研究室編『ポストコロニアリズム——日本と台湾(改訂版)』、2003年)、p.173。
- 9 2008年4月23日に、川合一良氏に取材したもの。
- 10 2008年8月20日に、高田良介氏に事実確認を行った。
- 11 内海繁編『ひとすじの道——高田三良の作品とその生涯』高田良介発行1973年、p.265、p.287。川合の六高時代の友人、宮内勇氏・内海繁氏の回想によるもの。
- 12 中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』緑陰書房2005年 pp.14-15。
- 13 田端良三「初心忘るべからず——八月の思い——」(交流編集委員会編『交流』脇浜義明発行1965年8月号)、p.8。田端良三とは、川合の筆名である。
- 14 (注)14に同じ。
- 15 (注)14に同じ。
- 16 田端良三「ある夜に」(交流編集委員会編『交流』脇浜義明発行1964年10月号)、p.16。
- 17 内海繁編『ひとすじの道——高田三良の作品とその生涯』、高田良介発行1973年、p.293。
- 18 同上、p.179。
- 19 同上、pp.182-183。
- 20 垂水千恵『台湾の日本語文学』五柳書房1995年、p.56。
- 21 同上、p.184。
- 22 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛会に関する一考察」(横浜国立大学留学生センター『横浜国立大学留学生センター紀要』Vol.2 1995年)、p.109。
- 23 (注)20に同じ。
- 24 唐瓊瑜「「二世」から見る、戦前における台湾文学」(国文学研究資料館編『第21回国際日本文学研究集會會議録』1998年)、p.61。
- 25 (注)24に同じ。
- 26 同上、pp.61-62。
- 27 川合三良「轉校」(中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集第五卷』緑陰書房、1998年)、p.440。なお今後、この全集からの引用は本文中にページ数のみ記す。
- 28 唐瓊瑜「「二世」から見る、戦前における台湾文学」(国文学研究資料館編『第21回国際日本文学研究集會會議録』1998年)、p.62。
- 29 同上、pp.62-63。
- 30 濱田隼雄「南方移民村」(河原功編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集 第三卷』緑陰書房1998年)、pp.102-103。
- 31 井出勇「戦時下の在台日本人作家と「皇民文学」」(台湾文学論集委員会編『台湾文学研究の現在』緑陰書房1999年)、p.100。
- 32 西川満「文芸時評」(河原功・中島利郎編『日本統治期台湾文学文芸評論集 第五卷』緑陰書房2001年)、p.44。
- 33 内海繁編『ひとすじの道——高田三良の作品とその生涯』、高田良介発行1973年、p.18。
- 34 同上、p.33。
- 35 同上、p.43。
- 36 同上、pp.79-80。

## Kawai Saburo's Works in Colonial Taiwan: Annexation Policies for One Japanese Writer in Taiwan

MATSUO Norifumi

**Abstract:**

In the 1940s, some Japanese writers in Taiwan promoted policies mobilizing Taiwanese for war. Such policies can be considered annexation policies. The purpose of this thesis is to identify Kawai Saburo as being a writer who wrote about the contradiction in these annexation policies.

This thesis analyzes two types of his works. In the first type, for instance, "A Certain Time" (1941) or "Engagement" (1942), only Japanese appear in the story. The Japanese suffer from oppression by power, the death of a lover by the war and so on.

The second type, represented by "One Reduced Drawing"(1942), depicts the relations between Japanese and Taiwanese. The Taiwanese in this work, however, never become intimate with the Japanese. In this work, three junior high school students, two Japanese and one Taiwanese, promise to meet again 20 years later, and indeed, at the end of this story, they meet as they had promised. But they can meet only in the arena of warfare, and the relations between them are unequal and defined by the class structure of the military.

Kawai depicted the contradictions that existed both among Japanese and between Japanese and Taiwanese under the annexation policies.

**Keywords:** annexation policies, total war, Japanese-born-in-Taiwan, integration of Taiwanese and Japanese